



司馬遼太郎

国盗り物語

第二卷

斎藤道三

後編

新潮社版

国盗り物語 第二卷

——斎藤道三（後編）

昭和四十一年一月二十五日 印刷
昭和四十一年一月三十日 発行

定価 三四〇円

著 者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発 行 所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)二二二(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・神田加藤製本所

© by R. Shiba

目

次

女	買	い	………	セ
夕	月	………	………	一四
香	子	………	………	二〇
小倉山問答	………	………	………	二七
藤左衛門	………	………	………	三四
続・藤左衛門	………	………	………	四〇
夜	討	………	………	四七
上意討ち	………	………	………	五四
雲がくれ道三	………	………	………	六二
舞いもどり	………	………	………	六八
法師白雲	………	………	………	七五
雑話	………	………	………	八三

松山合戦	八
小見の方	九
雨	一〇
姓は斎藤	一一
馬鞭をあげて	一八
わが城	一五
木下闇	一三
二条の館	一四
月の堂	一七
紙屋川	一五
若菜	一六
織田の使者	一六

美濃の蝮	一五
淫府	一八
漁火	一九
三段討ち	一六
英雄の世	二〇
尾張の虎	二〇
蝮と虎	二七
濃姫	三五
京の灯	三三

国盗り物語

第二卷

斎藤道三（後編）

女 買 い

加納城主になった庄九郎の毎日は、ひどくいそがしい。庄九郎は、目標を二つ樹て、すべての精力と智恵と行動を、それに集中した。

一つは、美濃八千騎の地侍どもの慰撫である。

(どこの馬の骨かもわからぬような男に、川手城につぐ美濃第二の要城を乗せとられてたまるか)

と、たれしもが思っている。人間通の庄九郎に、その感情がわからぬはずがない。

(思うのが当然なことだ)

庄九郎は、ひとりおかしかった。

どう慰撫するか。

(わし自身にはできぬ)

それだけの権威が、まだ庄九郎にはない。

(ただ一つ、策がある)

それは、あたらしい守護職、国主、美濃守、お屋形様で

あられる土岐頼芸の神聖権を利用することである。

美濃八千騎といっても、かれらは、鎌倉以来ここで勢力を扶植してきた土岐家の一門、一族、姻戚、遠縁関係にあたる者ばかりで、いわばこの一国は一つの巨大な血族団体になっている。

その宗家(本家)が、守護職頼芸なのだ。

当時の日本人の宗家への気持は、信仰といっていいほどのもので、この信仰がわからなければ、頼芸がこんどあたらしく就いた「守護職」という地位のありがたさが読者にはわかりにくい。

守護職は、その後天下にぞくぞくとむらがり出てくる出来星の成りあがり大名とはちがい、血族の「神」なのである。

そのころまでの日本民族は、民族社会の連合体であった。とくに武士にあつては。

余談だが、日本史の治乱興亡を通じて、なぜ天皇家が生き残ってきたかといえは、この血族信仰のおかげである。

氏族の頂点に、天皇家があるのだ。土岐家は源氏で、その遠祖は八幡太郎義家にさかのぼり、さらにそのかみは清和天皇から出ている。源平藤橘すべて、その祖を天皇家におく。

当時、どの日本人も、むろん土民までも、遠祖はその四姓のいずれかであると称した。

たとえば庄九郎は自分のモトの姓の松波氏が遠くは藤原氏から出ていと称している。のちにかれの女婿になった織田信長は、はじめは藤原氏と称し、途中で平氏に変えた。徳川家康は伝説的な家系をつくり、源氏と称した。それら、日本人のすべての氏の総長者が天皇なのである。

血族信仰の総本尊といっている。だからその存在が神聖とされ、いかなる権力者も、革命児も、この存在を否定することができなかった。

その地方的規模が、美濃では土岐の宗家である。頼芸は美濃氏族団の小天皇であり、美濃では犯すべからざる「神聖」であった。

庄九郎は京都生まれだから、各代の権力者が、この天皇という非軍事的な神聖宗主をいかにたくみに利用してきたかを、知りぬいている。

そのこつで、かれがその地位につけた美濃の小天皇頼芸の神聖を大いに利用した。

むろん、頼芸に苦情をいいにくる一族、一門の者が多い。ひどく多い。

「あのような氏素姓も知れぬ者をお近づけになりませぬように」

と、かれらは頼芸に耳打ちする。

が、頼芸は、庄九郎の貴族的教養にシンから惚れこんで

いるから、庄九郎の自称する家系をも頭から信じこんでいた。

「なに、たかがあぶら屋と申すか。そちらは知らぬからそう申すのだ。かれは北面の武士（仙洞御所の武官）松波家の正流であり、松波家は藤原氏より出ている。公卿、殿上人でないとはいへ、それに準ずる家系の出のものだ」

美濃源氏の宗家土岐頼芸が、庄九郎の血統に折り紙をつけるのだから、一族、一門の枝葉の者はそう信じざるをえない。

「されば貴種でありますとしても」

と、かれらはさらに膝をすすめている。

「邪智に長けた者でござりまする」

「言葉をつつしめ」

と、頼芸は、庄九郎に知らず知らずのあいだに教育されたとおりの返事をするのだ。

「あの者は、智と正義によってわしを守護職にしてくれた。そちなどがいうごとくかれの智恵が邪智であるとすれば、わしが邪な心で守護職の地位についたことになる。されば汝らはわしの地位を非とするのも同然。かれを悪態に云うことは、汝ら、わしに対し謀反心があるといわれても仕方がない。それを押しでなお申すか」

みな、だまってしまう。

第二の目標は、頼芸という小天皇をさらにより濃厚に庄九郎の手中のものにせねばならぬ、ということであった。

貴顕のうまれの者など、いつ気が変わるか知れたものではない。

(頼芸様をいよいよわしの掌中にかたくにぎりしめるには)

女である。

それしかない。

現に頼芸は、守護職と川手府城を得たとたん、ひどく好色になってきた。

「新九郎よ」

と庄九郎をあたらしい名前てよび、ちよつと、気はずかしそうな顔をしていった。

「なんでございましょう」

「無理であらうな」

「なにが、でございます」

「わしが願望は」

「あははは、美濃の国主にさえて差しあげましたるこの長井新九郎利政、わが力でできぬことはござりませぬ。ことにお屋形様のおんためとあれば、天竺てんてくの空をとぶという金の翼の鳥といえども獲とつて参りましょう」

「まことか」

と頼芸は少年のように眼を輝かせた。が、その下瞼は、荒淫ではれぼったく垂れている。

「さ、申されませ」

といいながら庄九郎、この馬鹿がえがく夢とはどういふものか興味があつた。頼芸のいまの精神の状態を知るには、必要なことだったのである。

(この馬鹿が、なにを望むか)

庄九郎は微笑しながらさりげなく、

「天下でもほしいのでござりまするか」

「いやいや、左様なものはわしには持ち重りがしよう」

(そのとおりだ)

庄九郎は内心、おかしくて仕方がない。しかし、ひと安堵あなごしもした。国主になつた以上望むのは当然天下であるべきだが、頼芸にはそういう方面の夢はないとみえた。

さらに、庄九郎はそれとなくきいた。頼芸にどれほどの政治的野望があるかを。

「されば、隣国の尾張でござるか。いやさ、隣国といえ

近江もござるし、東は信州がござる」

「信州は寒かろう」

と頼芸の反応はとりとめもない。

「寒いのは、おいやでござるか」

「わしは洪水と吹雪ほどきらいなものはないのを、そちは存じているはずじゃ」

「あ、左様でありましたな。されば近江はいかがでござろう。湖東の美田は、天下の諸豪の望んでやまぬところとござりまする」

「近江にはよい鷹がおりぬ」

「ははあ」

鷹は、画家としての頼芸が、好んでやまぬ主題である。いや、鷹しか描いたことのない男なのだ。現在でも美濃の旧家などで頼芸えがくところの「土岐の鷹」がいくらかも残っているところからみて、月に何点となく描いていたのであろう。

「国がほしくないというおおせならば、頼芸様に恨みを抱く國人（地侍）の首でもとって参れというおおせでござりまするか」

「左様な者がいるのか」

「おりぬ、とは申せませぬ。げんに御縁辺におりまする」と庄九郎は、暗に自分に対する反対勢力の総大将である長井利安の顔を思いうかべながら、いった。

「あははは、左様な者はおりぬ」

と、これだけは頼芸は断言した。そうであらう。美濃の神聖宗主に逆おうとするような者がいるはずがない。

「新九郎、女だよ」

「なるほど。左様なことなら、いと易うござりまする。人間の人数の半分は女でござりまするからな」

庄九郎は、いよいよ上機嫌だった。その安気そうな庄九郎の顔をみて、頼芸はこまったような表情をした。

「新九郎、女は女でも、チトちがうのだ」

「むろん、美人でありましょうな。お屋形様のお好みは、よく存じております」

「それはありがたいが、美人というほかに願望がある」

「のぞみがあればこそ、人間でござりまする。シテ、どのような？」

「天子の内親王がほしい」

あつ、この阿呆は。と庄九郎は一瞬がく然としたが、驚きは顔に出さず、

「よう打ちあけてくださりました。では早速ながら調べて参りましょう」

物でも運ぶような調子である。

「新、新九郎、たしかにそちは請けおうてくれるか」

「さん候」

「易う請けおうて、わしを期待させておき、あとであの話は成りませなんだ、と申してわしを悲しませるのではあるまいな」

「この山崎屋」

といいかけてあわてて、長井新九郎、と云いなおし、

「左様なことをしたためしがござるか」

「まあ、それほどの難事だというのだ」

「難事でも、お屋形様を美濃の国主になし奉ったほどの難事ではござりますまい」

「まさか、何者とも知れぬ京女をつれて参って、これが内親王と申すのではあるまいな」

「自慢ではござらんが、この新九郎、山崎屋と申しましたるむかしから、油の良質さは天下第一でござりました。品物だけは確かな男でござりまする。現に、お屋形様は、まやかしてもなく、歴とした美濃の守護職におつきあそばした」

庄九郎がもってくる品物は信用ができるという意味であらう。

「頼む」

と頼芸は、手を合わせた。

美濃の君主になったとたんに、それにふさわしい栄^{しやう}爵^{しやう}を、高貴な女性^{きうい}を得ることによって表現したかったのであらう。

いや、頼芸も男だ。京にのぼって天子を擁し、天子の次位の位につき、関白か將軍になって天下に号令するというのも戦国男子の道かもしれないが、頼芸はそのかわりに天子の娘を得るといふ裏街道で、よく似た快事を味わおうとしているのちがいない。

(夜具の上での天下取りじゃな)

庄九郎は、頼芸がおかしかった。

「さればお屋形様、いまの御台所様を放逐なさるのでござりまするか」

「め、めっそももない。あれはあれじゃ」

「されば側室に？」

「まあ、そういうことになる」

「それはむずかしゅうござりまするなあ」

といったが、なんの、正式の婚儀のほうがよくほどむずかしい。公卿の最高の家格である五摂家の姫君ならこういう乱世だから、むしろよろこんで地方豪族の宗家にやって来ぬともかぎらないが、内親王がそのままの地位で実力大名の正室になったという話は、あまりきかない。

(むしろ、側室のほうが話が早い)

庄九郎は、御殿を退出した。

加納城にもどると、赤兵衛に用件の筋を云いかけ、すぐ京にのぼらせた。天子にはどういふ姫が在るか、下調査をしておくためである。

赤兵衛が発発するとき、庄九郎は、

「わしが上洛すれば話がつくような様子ならすぐ急飛脚を差し立てよ」

といっておいたが、日ならず、赤兵衛から急飛脚がやってきて、赤兵衛の手紙を庄九郎に渡した。ひらくと、

(これでも文字か)

とあきれるほどへたくそな文字で、

——一人、おり申候。

と書いてある。下賤は不敬なものだ、と庄九郎はにがしがしうにそれを破りすてた。

庄九郎は、深^み芳^{よし}野^のや城^{しろ}中の腹心の者には、

「ちよっと、さる御山^{おやま}へ参籠^{さんろう}にまいるゆえ、たれにもわしが不在^{ふざい}じゃというな。みなには病氣^{びやうき}引き籠^こり中と申しておけ」

といった。

いまのような物騒な世では、城主がおらぬとわかれれば、城外の勢力はいうにおよばず、城内からも反乱がおこらぬとも限らない。

庄九郎は、耳次など、心きいた郎党十人に油商人の格好をさせ、むろん自分もむかしのその装束にもどつて、夜陰城を出、中仙道をだいそぎで京へのぼつた。

山崎屋のそばまでくると、店さきはいいかわらず荷作り、荷出しで賑わい、庄九郎が居た当初と繁昌ぶりはすこしもかわらない。手代の杉丸らが力をあわせて店をまもっている証拠なのだ。

ぬっと店の土間へ入ると、

「あつ、旦那様」

と、杉丸が白昼^{びやくちう}ばけものを見たようにびっくり仰天した。まさか、前触れもなしに庄九郎が帰ってくるとは思わなかったのであろう。

「なにを驚く」

庄九郎は、店さき、店の中、使用人の働きさま、手代の指揮^し揮^きをじつと見、

「ぬからず精を出しておるな」

と満足そうにうなずいた。

さらに、桶のふたをとり、指を油につっこんで舐^なめてみた。

ちよっと考えた。

「品質も落ちておらぬ」

すっかり、以前の山崎屋庄九郎にもどっている。

「早速、お万^{まん}阿御料人^{あごりょうにん}様にお報らせいたしましたよう」

と杉丸がとびあがるようにして駆け出したが、庄九郎はおさえた。

「いや、驚かしてやろう」

庄九郎は土間で足をすずぎ、旅塵でよごれた衣装をぬぎすて、京第一の大資本の旦那らしくちかごろはやりの絹小袖に手を通し、帯を締め、水で髪をちよっとなでつけてから、美濃から連れてきた長井新九郎利政としての郎党どもに、

「店の者も美濃の郎党もおなじわしの身のうちだ。店の者、いたわって世話をやいてやれい」

「はい」

この旦那が好きでたまらぬ杉丸は、勢いよく返事をした。

「頼むぞ」

と、庄九郎は奥へ通る。

お万阿は、自室にいた。

庭のみどりが、縁の日射しをまっさおに染めている。

庄九郎は廊下から忍び足で入り、すわってなにやら、錦のつづれを縫いあわせている様子のお万阿の両眼を、背後から、

「うっ」

とおさえた。

「た、たれ？」

お万阿は驚いてもだえた。

「わしよ」

「あっ、旦那様」

喜びで、いっそうにもだえて庄九郎の手をもこうとした。

「じつとしていろ、そのままで」

と、庄九郎は背後から抱きすくめた。深芳野にはない豊かな肌の感触が、ひさしぶりにお万阿への庄九郎の欲望をよみがえらせた。

「そのままにしておれ」

と庄九郎はお万阿の両眼をおさえたまま押し倒し、両股を割らせた。

「い、いけませぬ。たれか参ります」

「夫婦だ、憚ることもない。店の者にもみせてやれ」
すぐ庄九郎の欲情がお万阿に移り、お万阿も夢中になった。

両眼をおさえられたまま。

「見せてくださりませ、お顔を」
うわごとのようにいっている。

夕 月

その夜、庄九郎はひとり自室にいた。美濃からの急ぎの旅のあぐくである。普通人なら足腰が木のようになっているべきところだが、この男の顔は疲れもみせない。

（世に、仕事はどおもしろいものはない）
と黙っていた。

それが庄九郎を疲れさせないのであろう。
横で、一穗の灯火がゆれている。

——つ、と縁のむこうの杉戸がひらいた。

「赤兵衛か」

「左様でござりまする」

と、縁側で声がした。

「入れ」

「へへっ」

赤兵衛が、性の悪い顔を神妙に伏せながら膝をにじりこませてきた。

後ろから、耳次も入ってきた。

「まず、近う寄れ」

「されば、寄らせていただきまする」

低声がとどくほどにまで寄ってから、

「天子の姫」

「内親王といえ」

「へっ、そのおなご」

「おなご、とは不敬であろう。赤兵衛、そちもわしの郎党なのだ。ゆくすえは大名にもせねばならぬかと思うているのに、いつまでも妙覚寺の寺男の下品さではこまる」

「えへへへ」

愛想のつもりであほう笑っている。この様子では一生大名にはなれぬかもしれない。

「格好なのが、一人いました」

「そのことは、そちの手紙で知った。どのようなお方か」

「齢は十八。長けておりまするが、かがやくばかりのうつくしさでござりまする。——殿が」

と、庄九郎の顔を指さし、

「ご欲心をおこされはせぬかと心配でござりまする」

下卑た笑いをうかべた。

「名はなんと申される」

「香子」

ふむ、と庄九郎はうなずいた。

内親王とは、宮廷では「内の姫御子」とよばれている。

明治の皇室典範では嫡出の皇女、または女子の御嫡孫、御